

税に支えられている

松木心優（愛媛・今治市立玉川中学校）

税金は私たちの生活のためになくてはならないものである。私は聴覚障害を持っており、「障害者手帳」というものを持っている。これを持っておくと、生活する中でかかる税金が安くなり、生活が便利になる。

私が今、幸せに暮らせているのは税のおかげだと母から言われたのは先日のことだ。私は部活で卓球部に入っており、ときどき休日に友達と公共施設の体育館で卓球台を貸し切って練習をしている。ある日、受付で障害者手帳を見せると貸し切る時にかかるお金が無料になった。私はびっくりして母にどうして？と言ったら税のおかげだと言われた。この体験を通して税について興味を持ったので、インターネットで調べてみることにした。

私が持っている障害者手帳はたくさんのメリットがあることが分かった。私は人工内耳という機械をつけている。その機械を購入したり、修理する際に払われる税金が安くなったり、交通費や医療費の割引などいろんな場面で障害者手帳が活躍していることを知った。障害者手帳をもし持っていなかったら、今はどうなっていたのだろうか。私が幼い時に装着していた補聴器の費用や人工内耳の手術代、機械の費用、病院のリハビリ代、修理代が全て自己負担であったら、私はこれらの医療を全て受けることは出来ていなかっただろう。なぜなら、例えば補聴器は両耳だと約十三万もするし、人工内耳の手術だと入院費などの総費用を含めると約四百万円程と非常に高額だからだ。もし、これらの費用が全て両親の自己負担であったら、私は今のように生活できていないだろう。

手術なしでは家族や友達と十分にコミュニケーションが取れなかったり、勉強の内容が分からなかったりして、今ほど楽しく学校に通うことは出来ないと思う。私は幼い頃、補聴器では十分に音が聞き取れず、五歳の時に右耳の人工内耳の手術を受けた。人工内耳になったことで補聴器では聞き取れなかった様々な音が聞こえるようになり、私の世界は広がった。そして、小学校六年生の時、左耳の手術を受けた。中学生になり、勉強と部活の卓球に励んで、充実した生活を送ることができている。私はそれだけ障害者手帳に助けられているので、ありがたみを感じている。

しかし、その一方で、「障害者」と認定されることへの抵抗感や、家族や周囲からの理解が得られないことから、障害者手帳を持つ資格のある人が手帳を持たず十分な支援を受けることが出来ない事もあることを知った。私は家族や周囲の理解によって、幼い時から十分な支援を受けることが出来ているので、このような人がいるのは残念だと思う。少なくとも私は障害者であることを悪くは思っていないし、税金のおかげで今の私がいると考えている。大人になって、働くようになったら税金を払い、次世代の同じような子供達の助けになりたいと強く思う。